ARCADIA

64
SPRING 2015

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
［アルカディア］

眼の極楽⑮　江戸の花園

館長　榊原悟

ESSAY

春の錦

中でも狩野永敬（一六五四～一七〇三）の『定家詠月次花鳥和歌図屏風』（東京国立博物館蔵）、これこそが、その代表作（図1）。図は、名が示す通り定家の和歌にちなむ十二ヶ月各月の花と鳥を、六曲一双＝十二扇に、およそ割り振って描いたもの。その点では押絵貼屏風のそれ（IIのⒶ）と大差ないが、押絵貼の十二図各図が、一図で完結しているのに対し、この場合は地景（地面や水面、山並みなど）や金雲、すやり霞を、二扇画面を超えて連続させている点で大きく異なる。これによって左右両隻は、それぞれひと繋がりの図様となる。金雲、すやり霞が花と鳥の、時に前景、時に後景＝背地となり、前後関係が示される。両隻ともその左端、六月の鵜飼い、十二月の雪梅の光景の大小が、前の月のそれと齟齬をきたしていることは否めないが、全体としてこれで完結、桃山時代以来の大画面金碧花鳥画の系譜に連なっている点を見逃してはなるまい。

とは云え、図はどうみても「定家詠月次花鳥和歌図」である。描かれた花鳥も、後述するように一樹を除けば、他はすべて定家の詠んだそれに限られる。しかも一ヶ月分の花と鳥とが、一扇画面にほぼ過不足なく配分される。永敬の父永納（一六三四～九七）の『本朝画史』巻四「押絵」の項に、押絵すなわち押絵貼屏風に相応しい画題として、「十二支之図」および「十二月花鳥図」が挙げられているから、永敬も「定家詠月次花鳥和歌図」を、この画面形式で描くことに習熟していたのだろう。ただし『鴫の羽掻』所載の「定家詠月次花鳥和歌」挿図からの影響については、両者の図様が近似するところから大いにあり得ると思われるのだが、本図の落款「狩野縫殿助永敬筆」に永敬の、と云うより京狩野家の通称「縫殿助」が併記されている以上、その制作も『鴫の羽掻』の刊行された元禄四年（一六九一）を遡る可能性もあるだろう。その当の『鴫の羽掻』の挿図に影響を与えたとみられる探幽本からの影響や、さらに『本朝画史』の記事によれば、すでに京狩野家にはこの画題の粉本があったとも推定されることから、永敬本の図様の典拠は、それらを含めて幅広く検討すべきだろう。

が、そのことよりも、さし当ってここで注目しておきたいのは、定家が詠んでいない樹木の存在である。むろん、それが通常の「定家詠月次花鳥和歌図」に描かれるはずもない。その樹木、右隻の松こそが、それである。右より第二、三扇にわたって、ひときわ大きく描かれている。画面に圧倒的存在感を誇る。そのためであろうか、この屏風を、わたしたちは「定家詠月次花鳥」と認識する以前に、一瞬、単なる「四季花鳥図」と思ってしまう。しかもこの松は、笠松の両端をぴんと上げ、あたかも揺ら揺らと舞っているようでさえある。その姿形は、二条城二の丸御殿大広間四の間障壁画「松鷹図」の松を思わせる。狩野山楽筆の可能性が指摘される松である。山楽から数えて京狩野家四代目、永敬が山楽様の松を描くことは充分あり得るだろうし、逆にこの永敬の松が「松鷹図」の筆者山楽説の傍証の一つとなるのかも知れない。しかも、この松の存在よって図が「四季花鳥図屏風」の右隻としての性格も持つこととなった。「定家詠月次花鳥和歌図」としての新しさ、趣向は、この一本の松にかかっている、とさえ称して過言であるまい。

その松の巨木に三月の花・藤が絡まる。藤と松と云えば、『隆房卿艶詞絵巻』の老松にまとわる藤波の蔓に見立てて、

かすがの山のふじなみの木だかき色に

の文字を葦手として描き込んだ、あの「松に藤」が印象深いが、これを挙げるまでもなくこの組合せは相性がいいようで、古来、作例も多い。さしずめ天元二年（九七九）十二月、源順が円融天皇の命で屏風歌として詠んだ歌、

紫の藤さく松の梢には　もとの緑も見えずぞありける

にちなむ屏風絵があるだろう。

永敬の屏風絵にもそうした図様の伝統が流れていることは疑いないが、さらにもう一つ、「十二ヶ月歌意絵」からの直接的影響も考えてみるべきだろう。言うまでもなくこれも『本朝画史』の云う「十二月花鳥図」の画題の一つであるが、こちらは、定家ならぬ阿波守畠山匠作亭で文安年間（一四四四～四九）開かれた歌会で詠まれた月次詩歌にちなむもの。その三月の歌は、

たねとなる筆のすさびの松のはを　ちらぬ例にかかる藤波

とある。これを虚心に読めば、確かに永敬の東博本の松に絡む藤の図様になるだろう。いや、実は『鳴の羽掻』には、この畠山匠作亭詩歌とその絵とが収められているが、その三月分の挿図もほぼ同様になる。となると永敬の東博本の図様的典拠はやはり『鳴の羽掻』に求めるべきなのかも知れない。だがそう速断することよりも、そうした「松に藤」を呼び込むことで、永敬のこの図が、「四季花鳥図」的味わいを深めた点を改めて強調しておきたい。

こんな作もある(図2 サントリー美術館蔵)。「四季花鳥図」ではない。『春夏花鳥図屏風』六曲一双である。さらに一双の「秋冬花鳥図」を加え六曲二双の「四季花鳥図」をなしていたかも知れない。そうなれば空前の超大作なのだが。筆者は永敬の父永納。左隻中央に同じく「松に藤」が細密の筆致で描かれる。構図の中核をなすのも同様だ。いや、この松の、一図に占める位置は、さらに大きいとみてよいだろう。永敬の松が山楽様であったのに対し、永納のそれは、独特の樹幹の形態より、父の山雪様を踏襲したものか。

その永納の『春夏花鳥図』、父子の作だからと云うだけでなく、永敬の『定家詠月次花鳥和歌図』に極めて近い。そう思うのは、松に藤を絡ませた図様が共通するだけではない。ほとんど解体された結果、それと気付かないだけで、実は画面の其処此処に「定家詠月次花鳥和歌」にちなむ花と鳥とがちりばめられているからである。右隻の柳に桜、菫(春草)、鶯に雉、左隻の藤に菖蒲(燕子花)、郭公などである。しかし、それらは右より月を追って、一扇ごとに配されるのではない。両隻を通じて、およそ春から夏の花と鳥が自在に配される。金雲、金地、流れが六扇の図様を無理なく一図に繋ぐ。樹木や草花も複数面に及ぶ。まさしく「花鳥図」である。「定家詠月次花鳥和歌図」の影響は跡形もない。わずかに花と鳥のモチーフによって、それとの関連を窺うに過ぎない。

だがこの事実は重い。「四季花鳥図」のモチーフ選択の有り様を示唆してくれていると思うからである。つまり永納の『春夏花鳥図』に描かれた花と鳥のモチーフのいくつかは、直接的には「定家詠月次花鳥和歌」に基づくが、さらに云えば和歌によって研ぎ澄まされた雅の心と眼が見出した花と鳥とみてよいだろう。要するに鶯も郭公も定家が詠んだそれだが、その背後には、さらに王朝人がその初音を待ちこがれた鶯と郭公とがあったと云うことだ。むろん柳と桜も変わるまい。その柳は青柳の糸であり、桜と組合せてこきまぜれば、都を春の錦に変える柳と桜であった。いや、柳桜を江戸初期の俳人松江重頼(一六〇二〜八〇)は、こう吟じている。

都入の手引きは柳桜哉

初めて上洛(出京)した人の需め(所望)に応じた一句と云うが、素性の歌「見渡せば柳桜をこきまぜて都は春の錦なりけり」を踏まえていることは明らかだろう。重頼と同時代人として永納の柳桜や他の花鳥を見つめる眼にも確かにこの雅の美意識が流れていたことは間違いあるまい。山楽より三代、京に生まれ育った永納が都の春の錦を知らないはずもないだろうし、むしろ彼こそが都入の手引人でさえあった。

となると、『春夏花鳥図屏風』が取上げた他のモチーフはどうなんだろうか。もとより永納の眼が選んだことは疑いないものの、萱草や白鷺、三光鳥など雅の心とは一線を劃しているようにも思われるのだが……。

松に藤かゝる目出度齢かな　春可

新年度をこの一句で言祝ぐこととしよう。

ESSAY

図1『定家詠月次花鳥和歌図屏風』狩野永敬筆
図2『春夏花鳥図屏風』狩野永納筆

EXHIBITION

平成26年度

新収蔵資料紹介

堀江登志実

平成二六年度、当館収蔵品に市内在住の大礒義雄氏旧蔵の俳諧関連資料が加わった。ここではその概要を紹介しよう。大礒義雄氏は愛知教育大学名誉教授で俳諧史を専門とされた方である。松尾芭蕉を始め、蕉門俳人の研究者として知られ、『新編岡崎市史』の近世学芸編の編集でも活躍された。当地域の俳人鶴田卓池研究の第一人者でもある。今回収蔵品となった資料は、芭蕉真筆の三点を始め、岡崎の鶴田卓池やその師匠である尾張の井上士朗の掛幅二〇点のほか、俳諧の典籍類である。なかでも典籍の近世を中心とする俳諧板本は二五〇〇冊余に及び、大礒コレクションの中核となるものである。

芭蕉真筆三点はいずれも元禄五年(一六九二)と推定されるもので、彦根藩士許六、大津の河合智月、膳所藩の伊与田左内にそれぞれ宛てた書簡である。許六宛の書簡は、許六からの来書に対する返書で、白馬の節会を詠んだ歳旦の批評と許六の来訪希望にたいして都合の良い日時を知らせることを内容とする。許六の芭蕉への傾倒ぶりがうかがわれる一書である。智月宛は、芭蕉の江戸橋町の仮寓から出されたもので、義仲寺在庵中にきめこまかに身辺の世話をしてくれた智月に芭蕉が謝辞を述べたものである。おりからの暑気もあって老齢の智月を思いやる芭蕉の人情の機微を読みとることができる。伊与田左内宛ては膳所藩士菅沼曲水宛の書状を毎度取次してくれることへの感謝と入来意向について伝えたものである。芭蕉書簡三点は大礒氏の芭蕉研究の熱意のなかで収集されたもので、その経緯は書簡内容とともに大礒氏自らの著書『芭蕉と蕉門俳人』のなかで明らかにしている。

鶴田卓池関連は多くが画賛軸で、卓池自ら絵を描き、賛を加えたものである。山水、梅、竹石、山里、嵐山、芭蕉、戎、鉢叩、松尾芭蕉、卒塔婆小町などを描き、賛を施す。その賛文は右肩下がりで独特な書体で記される。卓池は三河に多くの門人を擁してしたが、門人のひとり吉田の町人水竹が描いた鵜と篝火に卓池が賛をしたものもある。水竹が描いた卓池住居の蟹沢庵の図もコレクションに含まれ、岡崎市の指定文化財品となっている。天保一五年(一八四四)、卓池は梅園の燕岡庵から菅生の蟹沢庵に移るが、本図は新庵の絵図を豊川の完伍のもとめに応じて水竹が描き、卓池が説明と発句を添えたものである。大礒氏の蒐集の目は卓池の師、士朗にも向けられている。特筆すべきものに士朗が鶴田桃生に宛てた書簡がある。桃生は卓池の一族とみられ、芭蕉百回忌(寛政五年＝一七九三)を記念して岡崎の十王堂に句碑を建立することに言及している。また、士朗が編集した芭蕉の追善集『麻刈集』のことにもふれている。岡崎における芭蕉百回忌の動きを知ることのできるたぐいまれな資料といえよう。

大礒氏所蔵品のなかで中心となるのが近世の俳諧書の板本類である。『奥の細道』など俳諧一般のほか、『鶴芝』、『燕岡集』など卓池に関係するものまで、大礒氏の長年の蕉門研究のなかで収集されたものである。近世前期から明治期に至るこれだけ多くの板本類のコレクションは蒐集にかけた大礒氏の努力の賜物である。これらを大礒義雄コレクションとして一括保存して整理・活用を図ることは当館の大きな課題である。将来、岡崎市での蕉風俳諧研究を発展させるうえで欠かせない貴重な資料となるにちがいない。

蟹沢庵図

哲学とか宗教とか

―木田元『反哲学入門』（新潮文庫 2010年）を読んで。

千葉 真智子

仕事柄か、そもそも気になるからか、あるいは読まなくてはという無言のプレッシャーからか、思想・哲学・宗教関係の書籍を読むことがままある。ただ、本質的に理解するのはとても難しくて、同じ箇所を反芻しながら、頭がついていかないなぁと思うこともしばしばである。自分の経験や日常的な感覚にピタッとこないのである。

そんななか、昨年、収蔵品展「そこに在るということ」を準備しながら、橋爪大三郎×大澤真幸のベストセラー『ふしぎなキリスト教』を読み返したりして、何となく解得できたと思った瞬間があり、さらに軽い気持ちで読み始めた木田元の『反哲学入門』（木田の死去に伴い、書店で特集が組まれていたのである）が、これまでに哲学書を読む度に私が感じていた違和感を見事に言い当てて、なお、その面白さを平易な言葉で語ってくれた。解説のなかで三浦雅士が「もしも十代のときにこの本に出会っていたら、こちらの人生も違っていただろうと思う」と述べている通り、私ももっと早く読んでいたらと素直に同感した。

当然なのだが、一神教の西洋社会では創造主は神のみ。世界の全ては神によって作られている。だから、「我思うゆえに我あり」としてデカルトが着目した人間理性も、あくまで神から与えられた能力であり、存在の大前提に神が在ることに変わりはない。「存在とはなにか」を根本問題とする哲学は、この思考を基にしている。一方で、多神教の日本では、事物は作られるのではなく「なる」もの。そうした世界観のなかで生きてきた日本人が、哲学に対して違和感を覚えるのは当然なのである。そして木田は、ソクラテス以前のギリシア世界に対して、プラトン、アリストテレス以後キリスト教世界に継承された哲学が、ニーチェに至り再び断絶したとして、以降の哲学が、いわゆる「哲学」を否定した「反哲学」であり、だからこそ、日本人にも受け入れられ易かったのだという。哲学者が哲学への違和感を実体験として語りながら、その問題の根っこを平易な言葉で説明する。こうした本を入り口にできていたら、もう少し違った哲学体験ができたのはないかと感じた。

COLUMN & TOPIC

『大樹寺文書 下』に思う

湯谷 翔悟

どうも甘いなぁ…。

そう感じたのは確か一月半ば。『大樹寺文書 下』の年度内校了に向けて、校正も追い込みに入り始めた時期でした。今回刊行する『大樹寺文書 下』では、幕末から明治初期の寺務記録である「日鑑」を掲載します。ふつう刊行までの手順は、古文書研究会の方たちがボランティアで翻刻・朱入れ→当館でデータ入力→入稿・校正となるのですが、明治五年日鑑は昨年見つかったために、当館で翻刻から校正まで全て行いました。しかし校正の過程で、解読の甘さに不安を覚えました。史料集の使命は言うまでもなく、貴重な史料を精確に活字化し、広く皆さまに読んでいただくことです。刊行する側にはその分大きな責任があるため、急遽古文書研究会の幹事の方にも校正をお願いすることにしました。時間がない状況にもかかわらず即座に確認していただき、多くの修正・指摘をいただきました。普段の校正は史料と向き合い行う孤独な仕事です。しかしこの史料集が出来上がるまでには、実に多くの人が関わっています。古文書研究会の方々をはじめ、編集委員会の先生方や印刷会社、そして何より、刊行をご承諾下さった大樹寺の皆様。この場を借りて篤く御礼申し上げます。

幕末～明治初年は、大樹寺にとっても激動の時代でした。今回掲載の日鑑は、廃仏毀釈の動きの中でも、必死に努力した多くの人びとの営為が詳細に記されています。様々な苦難が起こりますが、それでも人々を支えたのは、大樹寺を存続するという使命感だったように感じます。当時の人々の尽力の結果、今の大樹寺がある。そう思いながら読むと、つい胸が熱くなってきます。こんな気持ちにさせてくれる史料はなかなかありません。この日鑑、研究資料としても、読み物としてもオススメです。

この原稿を書いている現在、校了まであと五日。この先何十年も残る仕事をさせていただいていることに感謝しつつ、最後の最後まで史料と向き合いたいと思います。

休館中の活動① 家康公四百年祭記念事業

平成27年 家康公 四百年祭

平成二七年は徳川家康没後四百年にあたります。生誕地岡崎では「家康公四百年祭記念事業」としてさまざまな催事が催されますが、当館では家康についての講演会と、家康関連史跡をめぐるバスツアーを予定しております。この機会に郷土の生んだ英雄・家康と三河地域の歴史について、広く理解を深めていただければ思います。

◆講演会◆

講演会は家康が岡崎城に生まれて、三河を統一、遠江攻略により浜松に居城を移すまでの約三十年間について、「三河時代の家康を考える」という共通テーマのもとに開催します。この三十年間は織田氏と今川氏の両勢力が尾張・三河境で対峙、緊張関係にあった時代です。そして、三河は今川氏の支配から織田氏と同盟を組んだ松平氏による支配へと大きな時代推移があった時代でもあります。家康にとっては生後の今川方の人質、人質解放後の自立、一向一揆を経て三河を統一、戦国大名の仲間入りをする時期に至ります。講演会はこの家康の三河時代をさまざまな角度から検討するもので、講師については裏面情報を参照していただければと思いますが、家康研究や同時代研究の第一人者ばかりです。講演のあと、専門家の方一人にコメントをお願いしております。講演会の内容について講師とコメンテーターとの対談により問題点を鮮明にしてゆきたいと思います。また、会場の皆様からの質問などにも答えながら進めてゆきたいと考えております。

◆バスツアー◆

講演会の内容と連動して、「桶狭間合戦」「吉良城攻めと西尾城」「三河一向一揆」「東三河攻略」「遠州攻略」などをテーマに、三河時代の家康の足跡をたどります。家康の転機となった地に立ち、三河から遠江へと進出していった、若き日の家康の息吹を、是非体感していただきたいと思います。

多くの皆様のご参加をお待ちしております！

※講演会・バスツアーの詳細は、裏面Informationをご覧下さい。

COLUMN & TOPIC

休館中の活動② やさしいミュージアム講座

平成二七年度前期の
やさしいミュージアム講座について

【博物】

『善光寺如来絵伝』を読み解く
講師／鷹巣純（愛知教育大学教授）

今年は七年に一度の善光寺御開帳の年です。長野にある善光寺の御本尊の、インド・韓国・日本の三国に及ぶ活躍を描いた「善光寺如来絵伝」のうち、最古級の作品三点は、岡崎の寺院に伝わってきたものです。

今回の講座では、そもそも「善光寺如来絵伝」とはどんなお話なのか？そうした素朴な疑問を出発点に、世界を股にかけた阿弥陀如来の驚天動地の物語、そのあらましと仕掛を紹介し、なぜ岡崎に名品が集中しているのか？その秘密を三河でさかんな浄土真宗との関わりから紐解きます。そして善光寺如来に表された異界や疫病神、牛頭天王などのエピソードを取り上げ、中世仏教説話の奥深い森へ分け入っていきます。

【美術】

『楽しく読み解くキリスト教美術』
講師／古川秀昭（前 岐阜県美術館長）

ヨーロッパなどに海外旅行に行って美術館を見学すると、そこで出会う絵画の多くがギリシャ神話か聖書を主題にした宗教画です。何が描かれているのかはよく分からないけれど、その絵の美しさだけを記憶にとどめて帰ってくる方も多いのではないでしょうか。名画と呼ばれる絵画には、それ自体に魅力があることは確かです。しかしそこには描かれた意味があり、物語があることが多いのです。たとえばその絵のなかの登場人物が誰なのか、どのような物語が描かれているのかを知るだけでも西洋の名画がぐっと身近に感じられ、その意味が面白いほどわかってきます。

今回の講座では、そのような西洋美術の鑑賞のツボともいえるキリスト教美術の主なテーマやそこにある約束事を、古川秀昭氏の軽妙なお話によって楽しく学びたいと思います。ミレーからダ・ヴィンチ、日本の茶の湯まで、キリスト教をめぐっての縦横無尽なお話しは必聴です。

退職者の言葉

荒井信貴

美術博物館準備室以来早二〇年。今から思うとあっという間でした。ただひたすら調整役とサッカーでいうスイーパー役に徹してきたつもりで、自分自身でやりたい展覧会をやってきたかと問われれば「NO」と言わざるを得ないと思っています。自分自身の専門である日本の考古学を生かしてという点では「大古墳展」がありますが、これとて他の展覧会との掛け持ちで集中できず片手間仕事になってしまったのが惜しまれます。でも美術など専門外の展覧会も良い勉強になっており、かけ離れた分野でも何かしら自分自身の専門にフィードバックでき、少しは問題意識をもって展覧会を実施できたのではと思っています。「カラヴァッジョ展」や一連のシルクロード企画は特に勉強させられました。

そんな中で専門性を生かし対処できたのが一連のミュージアム講座でした。岡崎・三河の考古学・歴史学の最新の情報を少しでも提供できればと思い、研究書を渉猟、地域で行われている三河考古学談話会の毎月の勉強会にも欠かさず出席し、若い考古学研究者たちの成果や自身の知識を受講者の方々にお伝えできたのではと思っています。

受講者の中には、各地で行われる講演会・講座・シンポジウムでお目にかかる熱心な方々も見え、気さくに話ができ仲間意識がめばえてくる楽しさもあります。

そう、この二〇年間の学芸員での貴重な財産は、様々な人との出会いだったと思います。話しかけて頂ける来館者のみなさんをはじめ、親身に交渉相手となっていただけた他館の学芸員、一緒に企画を練り上げていく新聞社や企画会社のメンバー、輸送や展示飾りつけの日通やヤマトや会場設営会社のプロフェッショナルたち。空調管理のおじさんや掃除のおばちゃんたち。そしてそれを支える榊原館長をはじめとする館職員。誰一人欠けても来館者の皆様に気持ち良く展覧会を見て頂けなくなります。みんなで同じ方向を見て仕事をしてきた仲間なのです。本当に長い間ありがとうございました。美術博物館の今後の飛躍を祈念してアルカディア最後の筆をおきます。

COLUMN & TOPIC

退職者の言葉

寄田政邦

美術博物館に異動となり二年間、短い間ではありましたが、美術・博物のことなど何もかもがよく分からないことだらけの中で、ご迷惑をお掛けしましたが、皆様のご協力のおかげで何とか乗り切ることができた様に思えます。

毎年、今頃に思うことですが、三月、四月は「別れと出会いのとき」ということを実感します。特に今般、自らも退職ということで、感慨も大きいものとして心に響いている次第です。

市役所に入りいろいろな部課を異動し、その時々で問題点などに対処してきました。それらの中でも特に思い出深いものは、第一に岡崎市民病院の移転、引っ越しであります。現在の新病院での会計システムの構築と患者さんの移送について担当し、毎晩遅くまで皆で残って残務処理と翌日の段取り等をしていたものでした。一番良かった点は、冬の年末の引っ越しでしたが、患者さん全員が「無事に」新病院に移れたことでした。この折、私事ですが二日間ほど寝ずに陣頭指揮を執っていたため、新病院での救急外来の初日の患者となってしまったことは今ではよい思い出となっております。また、会計システムについては、明けて一月四日、外来が始まった時に、約三十分位でダウンしてしまいました。何度も何度もリハーサルを行った訳ですが、新システムを動かすことは簡単なことではないと痛感した次第でした。

第二には、児童家庭課で保育園の入園基準の拡大を行ったことです。当時、育児休業制度が普及してきた頃であり、育児休業取得によりお母さんが家にいることになり、その上の子には保育園退園という悲しい事態に対処したものであります。働くお母さん方の様々な不安を解消できたことが大変うれしく、さわやかな達成感を味わった仕事でもありました。

いろんな経験をいたしましたが、「失敗」の方が多かったように思えてなりません。

まだまだ未熟者ですが、ひとまず美術博物館を愛する市民の皆様や職員の方々への別れです。またの再会を楽しみにしております。

編集後記｜3月末をもって休館。同じくこの3月末をもって私も岡崎を退職することになりました。12年間、多くの方にお世話になり、本当に感謝しております。ありがとうございました。アルカディアの編集は、湯谷が引き継ぎます。ますます面白い誌面になることを期待して、一読者として待ちたいと思います。（千葉）

INFORMATION

■美術博物館 家康公400年祭記念講演会

「三河時代の家康を考える」

第1回 6月6日(土)「家康研究の最前線」
講師/平野明夫氏(國學院大學兼任講師)
コメンテーター/村岡幹夫氏(中京大学教授)

第2回 7月11日(土)「三河一向一揆について」
講師/金龍 静氏(本願寺史料研究所副所長)
コメンテーター/安藤弥氏(同朋大学准教授)

第3回 8月8日(土)「花押からみた徳川家康」
講師/播磨良紀氏(中京大学教授)
コメンテーター/平野明夫氏(國學院大學兼任講師)

第4回 9月12日(土)「家康の東三河攻略」
講師/山田邦明氏(愛知大学教授)
コメンテーター/小林吉光氏(豊川市文化財保護審議会委員)

第5回 10月10日(土)「家康の城」
講師/千田嘉博氏(奈良大学学長)
コメンテーター/奥田敏春氏(岡崎市文化財保護審議会委員)

第6回 11月14日(土)「三河から遠州攻略へ－今川氏と武田氏－」
講師/本多隆成氏(静岡大学名誉教授)
コメンテーター/柴 裕之氏(東洋大学非常勤講師)

※各回講演会後に、講師とコメンテーターによる対談を行います。
会場:岡崎市福祉会館6階 大ホール
(岡崎市朝日町3丁目2番地)
時間:いずれも午後2時～午後4時30分
定員:250名(事前申込不要) 参加費無料
主催:岡崎市美術博物館・中日新聞社
後援:岡崎商工会議所・家康公四百年祭推進委員会

■美術博物館 家康公400年祭記念 バスツアー

三河から遠江へ

－三河時代の家康の足跡をたどる－

第1回 6月20日(土)「桶狭間合戦」
当館出発→大高城跡→桶狭間古戦場周辺→大樹寺→当館着

第2回 7月18日(土)「吉良攻めと西尾城」
当館出発→東条城跡・花岳寺・華蔵寺→西尾城→当館着

第3回 9月19日(土)「三河一向一揆」
当館出発→本宗寺→勝鬘寺→本證寺→上宮寺→浄珠院→当館着

第4回 10月17日(土)「東三河攻略」
当館出発→岩略寺城跡周辺→牛久保城跡→一宮砦跡→二連木城跡→吉田城→当館着

第5回 11月21日(土)「遠州攻略」
当館出発→龍潭寺・井伊谷城跡→浜松市博物館→浜松城・引馬城跡→当館着

時間:いずれも午前9時30分～午後5時[雨天決行]
定員:30名(応募多数の場合は抽選) 参加費無料
申込方法:往復はがき(1回1枚)の「往信用裏面」に①コース名②参加者全員(4人まで)の郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号、「返信用表面」に代表者の郵便番号・住所・氏名を明記の上、岡崎市美術博物館「家康公四百年祭バスツアー」係までお申込みください。
申込期限:第1回5月29日(金)、第2回6月26日(金)、第3回8月28日(金)、第4回9月25日(金)、第5回10月30日(金)※いずれも必着

■平成27年度やさしいミュージアム講座

【博物】『善光寺如来絵伝』を読み解く
講師:鷹巣 純氏(愛知教育大学教授)
日時:6月～10の毎月第2金曜日＊ただし6月は第1金曜日・9月は第4金曜日 10時30分～12時
①「善光寺如来絵伝とは何か」
②「善光寺如来絵伝と四種絵伝」
③「善光寺如来絵伝と異界」
④「善光寺如来絵伝の疫病神」
⑤「善光寺如来絵伝と牛頭天王」

【美術】楽しく読み解くキリスト教美術
講師:古川秀昭氏(前 岐阜県美術館長)
日時/6月～10月の毎月第3金曜日 14時～15時30分
①「キリスト教美術って何?
ミレーの『落ち穂拾い』も聖書がテーマ…」
②「キリスト教美術って何?
聖母マリアの衣はなぜ青と赤なのか…」
③「キリスト教美術って何?
ルネサンスとバロックのキリスト教美術」
④「キリスト教美術 私が選ぶこの二点!!
『受胎告知』と『最後の晩餐』」
⑤「茶の湯に見るキリスト教美術」
＊休館中につき、会場は「岡崎市美術館」となります。
＊申込方法:往復はがきの「往信用裏面」に①希望する講座名②郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号、「返信用表面」に代表者の郵便番号・住所・氏名を明記の上、「やさしいミュージアム講座」係までお申し込みください。
5月14日(木)必着。

おしゃべり、あれこれ。

ぶれない“活き方”

時計の秒針が刻む小さな時の音が時間となり、毎日となる。その毎日が一週間、一か月、一年そして一生となります。そんな風に思うと今日も特別な日。どんな一日にしましょうか、と思えてきます。

自由奔放に見える人ほど、実直に生きることを楽しみ喜怒哀楽に溢れています。子供なんてまさにそう。本当はオトナのほうが断然自由で断然楽しいのです。けれど、子供は自由でいいな、なんて言ったりして。それも子供の実直さを羨んでいるからかも(笑)

パターン化された毎日の中で時間に追われ、時には驚くほどの大きな溜息をついたりもするわけで。そんな時は、ある歌のフレーズを聴きます。—「世間」という悪魔に惑わされないで、自分だけが決めた「答」を思い出して—。何度、この歌に背筋を凛とさせられ、元気づけられたでしょうか。情報が溢れている今だからこそ、惑わされず自分が信じて決めた「答」を常に意識したいものです。勿論、人は成長していくものですから目指す「答」も変わりますが、せめて小粋に生きながらもフレキシブルでいたいな、と思うわけです。

諸説ありますが、地球の歴史を一年と捉えると、人の一生は僅か0.6秒、瞬き程だとか。その一瞬に何かを残したい。だから、一生懸命生きたいと思うのでしょうか。(睦)

春の風物詩

お花見はすきですか。わたしはお花見がとてもすきです。わざわざ遠方へ行かなくても、岡崎には十分に桜を楽しめる名所があるので、いい街だなあと思います。少しずつ暖かくなる気候と、桜のやさしい色合い、お祭りの賑やかさ。いくつもの要素が相俟って、何ともわくわくさせてくれます。

伊賀川堤が家から近いので、普段なら昼まで眠ってしまいそうな休日も、朝のパリッとした時間に散歩へ出てみたりします。岡崎公園へは誰かと夜桜を見に行くことが多いです。夜はまだまだ冷えるので、防寒対策は万全に。頻繁に会う友人も、そうではない友人も、お花見は「期間限定」なので、ちょっと無理をしてでも集まるのがいいところ。屋台も楽しみの一つです。一番すきな揚げもちを、きなこで食べようかポン酢で食べようか迷っている時間もしあわせ。美術博物館のある中央総合公園の桜は、ユキヤナギと満開のタイミングが重なると一層見応えがあり圧巻です。

望んでか望まずか身の回りの環境が変化する春に、もし気持ちの整理がつかない時も、いつも同じ時期に咲いてくれる桜にほっとしているのは、わたしだけでしょうか。今年もまた春が来て、嬉しくて、わくわくしています。(若)

設備改修工事のため、
岡崎市美術博物館は平成28年3月31日まで休館します。

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］第64号 2015年4月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館
http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html
ARCADIA